

「青年海外協力隊」

長谷川 真知

Hasegawa Machi

**国際協力を志し
栄養士になる**

「さて、この歯は何からできていますでしょうか？」
インドネシア南部、ロンボク島の中部ロンボク県にある小学校。子どもたちに歯の形をした人形が手渡される。その中に手を入れてみると、ごはん、卵、大豆、パパイアなどの写真が出てきた。

「そう、みんなの歯は食べ物からできているんだよ。丈夫な歯になるように、好き嫌いしないで食べようね」。そう子どもたちに優しく教えているのは、青年

JICA Volunteer Story

PROFILE

1979年新潟県出身。短大卒業後、栄養士として病院に勤務。2011年10月から、青年海外協力隊(栄養士)としてインドネシアで活動中。

「みんなの健康を守り もっと多くの笑顔を見たい」

インドネシアのロンボク島にある保健所で活動する長谷川真知さん。この地域の人たちがバランスの良い食事が取れるよう、小学校を回って健康教育を行っている。



歯の人形から出てきたのは食べ物の写真。みんなで楽しく学べるよう、長谷川さんが手作りした

海外協力隊の長谷川真知さんだ。

大学では国際関係学を専攻していた長谷川さん。開発途上国の現状を自分の目で確かめたいと、2年生の時にフィリピンで孤児院を建てるボランティアに参加した。そこで目にしたのは、学校に行けなかったり、食べる物も十分でない人たちだった。「生まれた場所が違うだけなのに、私たち日本人とは全然違う。彼らのために役に立ちたいと思いました」。

そのためには、何か専門性を身に付けなければ。大学卒業後は一念発起して短大に通い直し、栄養士の資格を取得。病院に就職し、食事を作ったり、栄養教育を担当したりした。そして仕事にも慣れてきた3年目、「今が夢を実現する時だ」と決意し、協力隊に挑戦した。

同僚たちの やる気を引き出す

配属されたのは中部ロンボク県にある保健局。この地域では、栄養や衛生の知識を身に付ける機会が少なく、栄養不良になってしまう人も多い。そこで長谷川さんは町中にあるアイクムアル保健所を拠点に、地域の人々の食生活の改善を目指して啓発活動を行うことになった。

まずは、保健所の医師や看護師、助産師など約60人の仕事を見せてもらうことに。すると、患者さんが待っているのに、診察そつちのけで携帯電話をいじったり、おしゃべりをしたり…。遅刻や早退は当たり前だった。「所長はほとんど姿を見せない。給料が安いこともあり、全体的にやる気のない雰囲気が出ていました」。

中でも長谷川さんが気になったのが、保健所の義務である地元の小学校での健康教育が一度も行われ



a.「こうやって山の形をつかって指の間も洗いましょー」。子どもたちも元気いっぱい長谷川さんの真似をする
b.長谷川さんお手製の歯の人形。中から食べ物の写真を取り出せる
c.大人が読み聞かせなくても、絵本の絵を見て学べることがある
d.手作りの人形を使って虫歯予防について授業をする長谷川さん。実際に見て、触れる教材があると子どもたちの関心も高まる

ていなかったこと。このままでは、子どもたちは偏った食事や不衛生が原因で病気になってしまうかもしれない。「みんなで一緒にやりませんか」と同僚たちに声を掛け続けた。
しかし、5カ月たっても、誰一人動こうとしない。「こうなったら、まずは私がやってみるしかない！」。長谷川さんの挑戦が始まった。まずは小学校を一校一校回り、校長先生と話をした。健康教育の実施の許可が出たら、いよいよ本番だ。

大切なのは、子どもたちが楽しみながら学べる内容にすること。長谷川さんは日本の病院での経験を生かし、絵本や歯の人形などの教材を手作り準備した。「ゼロから始めるのは大変でしたが、子どもたちが授業で見せてくれる笑顔が励みになりました」。一校が終われば、また次の学校に掛け合いに行く。それを繰り返した。

すると次第に「これは何？」と同僚たちが手作りの教材に興味を示すように。長谷川さんは今がチャンスだと、人形を使った授業の仕方や、子どもたちが楽しく元気に学ぶ様子などを話した。すると「マチと一緒にやってみよう」と、一人、また一人と、同僚たちが集まってきた。実は、小学校の先生や子どもたちの親から、「また来てほしい」「できればずっとやってほしい」という声が保健所に届いていたのだ。「やっと自分の思いが伝わったよううれしかったです」と長谷川さん。それからは、同僚たちと一緒に健康教育に取り組むように。教材づくりや授業の進め方などについて話し合う場も増え、職場にも活気が出てきた。

活動期間は残り3カ月。長谷川さんは今日も同僚たちと協力しながら、地域の人々の健康を守るため奔走している。